

撰山棲霞寺石窟の成立についての再検討

馬 歌 陽

はじめに

撰山棲霞寺、六朝時代の都であったかつての建康城の郊外、現在の南京市の北東部にある。寺院の建立は五世紀末の南齊時代に遡る。宋・志磐が撰した『仏祖統紀』巻六では天台大師智顗とかかわる寺院を挙げ、撰山棲霞寺は泰山の靈巖寺、天台山の国清寺、荊州の玉泉寺と並んで、「天下四絶」の一つとされた。このような記述は唐代以降の文献に散見され、今日に至っても変わらない。そして、棲霞寺が建てられた同時代に、石窟の開鑿・石仏の造立も行われた。

周知のように、五・六世紀には雲崗石窟や龍門石窟のような大型石窟をはじめ、大小の数多くの石窟が中国北方の地に開かれた。これに対して南方では、文献上には「齊文皇帝造白山丈八石像並禪崗像」^①、「丹陽南牛頭山仏窟寺。現有辟支仏窟」^②といった石窟や摩崖仏像についてのいくつかの記述が見出せるが、江南地区で現存する遺

例として挙げられるのは浙江省剡山石城寺龕像と、本稿で取り上げる撰山棲霞寺石窟のみである。

南朝時代の石仏像は、四川省成都市の万仏寺址をはじめ、西安路、商業街、寛窄巷子、下同仁路等、成都市内の各地で次々と出土した。そのほか、成都から西北へ岷江を遡ると、彭州の龍興寺、茂県や汶川県でも南朝の紀年銘のある石仏像が発見されている。また、成都市の東北の綿陽市にある後漢末期あるいは三国時代に造られたとされる石闕、平陽府君闕の闕身には四十二個の小龕が開かれ、仏像や道教像が浮彫りされている。なかには「大通三年（五二九）」^③、「中大通三年（五三二）」など梁代の紀年銘がみられることから、これらの龕像の多くは梁代の作と考えられる。

その一方、南朝の中心地である現在の南京市およびその周辺では、仏像彫刻の伝世作品や出土作例の数は極めて少ない。近年、南京市内の德基広場や紅土橋から銅製や塑造の仏像や残欠が発見され、とりわけ德基広場の金銅仏に刻まれた紀年銘に劉宋の元嘉、南齊の永

明・梁の天監・普通・大通・中大通・大同といった南朝時代の年号がみられるという。⁽⁴⁾ また、二〇一九年八月から南京市西宮村路で劉宋期に遡るとされる仏寺の発掘作業が進められ、遺址から舍利石函、発願文が刻まれた滑石製仏具、銅製や塑造の仏頭、仏足などの残欠が出土し、これらも南朝時代のものと考えて差し支えないという。⁽⁵⁾ こうした南朝の都の健康からの出土作例が増えつつあることで、いまだ不明なまま南朝の中央作がどのようなものであったかについて論じることが可能になるだろう。

美術史の観点から、健康城の近傍にある撰山棲霞寺石窟を南朝の中央作と見てよいのは当然である。しかし、すでに吉川忠夫氏が指摘したように、棲霞寺の創立期に関わった明僧紹とその一族や僧侶たちは、華北東部の沿海地域から南渡した人がほとんどで、彼らを通して華北仏教が江南地区にもたらされたという。⁽⁶⁾ そうすると、撰山棲霞寺石窟は単に南朝の土壌から生まれたものとは考えにくく、より複雑な成立経緯があるように思われる。

撰山は伝世の文献史料に登場する五世紀末期の時点で仏教と結びついた傾向があり、六世紀に入ると棲霞寺僧侶の心を尽くした経営と南朝の権力層の庇護によって、三論学の拠点へと発展し、棲霞寺も名利として知られるようになった。撰山棲霞寺石窟の造営も五世紀末の南齊時代から始まり、南朝の梁、唐、後唐、明・清、さらに中華民国期にわたって新しい窟の開鑿や補修が繰り返し行われてきた。現在石窟は千仏岩、紗帽峰、千仏嶺という三つの区域に分けら

れる。そのうち、南朝期の石窟は千仏岩に集中する。

本稿では千仏岩の南朝窟を中心に取り上げ、撰山棲霞寺石窟の成立期に関わる問題をめぐって検討したい。まず、撰山に最初の仏教寺院（精舎）を造った明僧紹を代表とする明氏一族に注目し、青齊地域（現在の山東省の一部）から南渡した彼らが、仏教を通じてどのようにそれまで馴染みのなかった江南地域に自らの基盤を築いたかを検討したい。また、人格化した撰山の山神がしばしば文献に登場することに注目する。撰山の山神が五戒を受けて仏教の出家者になったという記事は、この山において仏教が最も有力な信仰になったことを示唆し、明氏一族と棲霞寺の僧侶らによる石窟経営を裏付けるものともいえよう。

一 撰山棲霞寺石窟南朝期窟の考古学調査の概要

撰山棲霞寺石窟の考古学調査は、一九二〇年代の向達氏の調査を嚆矢とする。向達氏は一九二五年十二月、一九二七年と一九二八年の夏の三回にわたって、石窟と十世紀頃に造られた石造舍利塔の現状や金石文などを記録した。⁽⁷⁾ ただし、第一回調査の直前、当時の棲霞寺の住持は仏像の保護を図ろうとして、像の表面をモルタルで覆い補修を行った。それによって、ほとんどの像は本来の姿を失ってしまった。その後、任簾氏⁽⁸⁾、閻儒文氏が重要な題記や石窟の形制について調査をした。八十年代に発表された宿白氏の論考には「無量

寿仏大龕」とその隣の二仏並坐龕（「次大龕」）について詳細に考察し、文献史料を用いて南方の無量寿仏信仰と弥勒信仰を論じた。⁽⁹⁾

九十年代以降、摂山棲霞寺石窟に対する本格的な考古学調査が進んでいる。一九九八年から北京大学と南京市博物館は共同調査隊を組んで、千仏岩を中心に詳細な調査を行い、石窟に番号を付けた。⁽¹⁰⁾

報告書によると、南朝期の石窟が集中する千仏岩は現在、彫像が二四〇体あり、窟、及び窟を伴う小龕は合計八十二個で、そのうち番号が付けられたものは二十九であるという。本稿では共同調査隊の番号を使用する。

千仏岩の石窟は南・西・北の岩面に分布している。図1で示したように、石窟の番号は北から西に続き、さらに南へ行くという順序でつけられた。石窟の形制と仏像の構成によって、南朝期と思われる石窟はおおむね二つの時期に造られたという。報告書によると、岩壁の南面と南東面の下部にある十九窟、二十窟、二四窟、二六窟、二二窟、二三窟、十八窟は第一期に属し、その開鑿年代は南斉永明二年（四八四）を上限とし、永元二年（五〇〇）を下限とするという。規模が最も大きい十九号窟（無量寿仏龕）の完成年代については、梁の天監年説⁽¹³⁾が行われているが、第二章に詳述する新出土「江総碑」の記述から、十八窟と二六窟以外、いずれも制作開始年代は五世紀の末、南斉時代に遡ることが確認できる。

また、五窟、十窟、十二窟、十三窟、十五窟、二一窟、二五窟、二八窟は第二期に分類される。そのうち、二一窟、二五窟、二八窟

も南東の岩壁に開鑿されている。

二八窟の窟外上部の岩面に「中大通二年□八月廿三日作」（図2）という摂山棲霞寺石窟で最も早い紀年銘がみられる。中大通二年は梁の五三〇年である。

南と南東の岩面にあるすべての窟は南朝期のもので、完成年代は五三〇年を上限とすると考えられる。その一方、五窟、十窟、十二窟、十三窟、十五窟という五つの窟は西の岩壁の下部に配置され、形制はいずれも方形で、両足を下ろす倚坐形の如来を主尊とした一仏二菩薩二弟子二力士の形式である。こうした統一性が高いことを踏まえると、これらの五窟はかなり近い年代に造られたと推定される。

従来、明・葛寅亮の『金陵梵刹志』など、明清時代の金石資料集に収録された陳・禎明二年



図1 千仏岩の立面図

(五八八) 江総が撰述した「撰山棲霞寺碑(并)銘」(以下、伝世「江総碑」とする)には、「三丈一尺五寸」の無量寿仏の坐像(図3)、および「三丈三寸」の両脇侍菩薩が造られたことが明記されているため、これらの像にあたる現在の第十九窟の一仏二菩薩については、これを論じた先行研究があるが、考古学調査によって像自体の詳細がより明らかになった。主尊の無量寿仏は台座の上に結跏趺坐し、禪定印を結ぶのに対し、左右両側には観音菩薩と勢至菩薩とされる像が蓮華座に立っている。両菩薩像はともに後世の補修を受けて当初の姿が判別できない。無量寿仏は袈裟の内側に內衣を着すが、当初のものではないため、原状は不明である。外側に袈裟をまとい、胸元を寛げ、裳裾を台座に垂下して裳掛座を形成している。主尊の頭部の額以上の部分は補修されたもので、その頭部の背後の蓮華形頭光の左側に「大中六年十月□□記」の紀年銘が残されている。大



図2 中大通二年の題記



図3 第十九窟 無量寿仏

中六年は唐の八五二年にあたる。これらのことを踏まえ、像の頭部は唐の会昌年間(八四一〜八四六)に破損され、大中六年に修復した後で銘文を残したと推測されている。⁽¹⁵⁾ また、窟後部の壁面に大きな蓮弁形光背を表し、無量寿仏の頭部のあたりに小さく見える蓮華形頭光を浮き彫りする。この窟の前部は崩れ落ち、明の万暦二十八年(一六〇〇)〜一六〇六)に補修されたため、光背の頂部は現在見えなくなったという。⁽¹⁶⁾

この無量寿仏と二菩薩は明仲璋と釈法度によって造られたと「江総碑」に記されている。明仲璋は棲霞寺の開山者である釈法度に対して居宅を喜捨し、棲霞精舎を建てた名士の明僧紹の第二子である。明僧紹は棲霞寺と石窟の成立に関わる重要な人物と言える。撰山棲

霞寺石窟の創立を語る二つの史料、すなわち上述した「江総碑」と唐の高宗李治が上元三年（六七五）に撰した「御制棲霞寺明徴君碑」（以下、「明徴君碑」とする）から、明氏一族が北方から江南の摂山へ南渡した以前と以後についてのが読み取れる。また、江総撰「摂山棲霞寺碑文并銘」（以下、新「江総碑」とする）が碑陽に刻まれた石碑が出土し、その碑陰にはこれまで知られなかった内容が記されている。次章以降、諸史料を用いて明氏一族に関する記述を改めて確認し、特に明氏一族と摂山仏教の関係性について検討したい。

二 新出土「江総碑」に記された

明氏一族による石窟の造営

（一）新出土「江総碑」とその成立時期

二〇〇二年、第十九窟の窟前の発掘作業で石碑が発見された。石碑の下部は欠失しており、現在碑首と上部の約三分の一が残されている（図4）。碑陽の冒頭には「摂山棲霞寺碑文并銘」という題がみられ、これは江総が撰した文章にちがいない。碑文は三十行にわたって整然と構成されている。碑陰は三つに分けられる（図5）。すなわち、石窟初期の各像についての詳細の記録（①向かって右部）、棲霞寺の寺域の土地の記録（②向かって左下部）、唐・大中年（八五四）僧智詳の修装記（③向かって左上部）である。

「江総碑」の原石は、唐の会昌年間の廃仏で壊された後再度立て



図4 新出土「江総碑」

直されたが、石が欠けたり、文字が見えなくなったりしたため、北宋の康定元年（一〇四〇）に僧の契先が襯贖を喜捨し、新しい石を購入し、原本に依って写した（「僧契先自捨襯贖石、依本写之」という。¹⁷ 伝世「江総碑」は明・葛寅亮の『金陵梵刹志』、明・梅鼎祚の『釈文紀』、清・陳毅の『摂山志』、清・嚴観の『江寧金石記』などの金石資料集に収録されている。上述の各録文は字句に若干の差異が認められるが、いずれも北宋時代に造り替えた石碑に遡る。ところが、新「江総碑」は伝世「江総碑」にみられない特徴があると指摘されている。¹⁸ すなわち、伝世「江総碑」では正字を使用しているのに対し、新「江総碑」では通仮字や異体字が見出される。また、伝世「江総碑」には多数の衍文が確認されている。確かに、

金石文字を記録する際に本来使っていた通仮字や異体字を正字に変えた可能性がないわけではない。しかし、新「江総碑」にはない衍文が存在することで、伝世「江総碑」には別の資料からの内容が混在していることが推測できる。『金陵梵刹志』の冒頭には「陳江総持及唐高宗碑尚完」⁽¹⁹⁾とあり、撰者の葛寅亮が実見したところ、北宋に立てられた「江総碑」は完全なものであった。先述の契先が「本



図5 新出土「江総碑」 碑陰（筆者による枠線と番号）

に依りて之を写」したという「本」とは、会昌年以前の原石碑をいうものか、「嘗重立」の石碑によるものか、現時点では判定できない。いずれにせよ、新「江総碑」は伝世「江総碑」の北宋より早い時期に成立したものと考えられる。

また、新「江総碑」が出土した第十九窟の窟前に建築構造の土台と思われる遺跡の存在が判明し、その面積は約三〇〇平方メートルであったという。現在第十九窟の周辺には石構造が残っており、また窟の外壁には梁を通す孔の痕跡も確認でき、かつては窟前に木構造の建築があったと指摘されている⁽²⁰⁾。磚や瓦などの出土物を見ると、この建築は晩唐から五代時期にあったと推測されている。さらに、新「江総碑」がこの遺跡から発見されたことで、南朝時代にすでにここに建築物が存在していた可能性が高いとされている⁽²¹⁾。そうすると、新「江総碑」は陳時代当初のものである蓋然性も考えられる。

なお、新出土「江総碑」の碑陰の向かって左下部には、棲霞寺の寺域の土地を記録した文書が見られる。そのなかに、「頻佳里」という地名が頻出する⁽²²⁾。この「頻佳里」とは、唐・道世の『法苑珠林』卷三六にも見出せる。すなわち、

齊棲霞寺、在南徐州琅邪郡江垂北郷頻佳里撰山之⁽²³⁾中。

これによれば、齊の棲霞寺は南徐州の琅邪郡の江垂北郷の頻佳里⁽²⁴⁾の撰山にあるという。これは棲霞寺の所在地について最も詳細な記

述である。『法苑珠林』当該箇所の割注によれば、本条の典拠は『梁京寺記』という。しかし、この棲霞寺条は現行の『梁京寺記』には収録されていない。諏訪義純氏によれば、現行の『梁京寺記』は南宋の紹興三十年（一一六〇）以降に成立したもので、道世が参照したのはより古いオリジナルな『梁京寺記』という⁽²⁵⁾。つまり、摂山のあたりを指す「頻佳里」という地名は遅くとも初唐時代までに存在していたと推定される。さらに、劉宋の永初二年（四二二）に淮南の徐州を「南徐州」と改称し、隋の開皇九年（五八九）に南徐州は廃止された。⁽²⁶⁾「南徐州」は明らかに南朝時代に使用されていた州名なのである。

棲霞寺条のほか、梁の南冥真寺条（『法苑珠林』巻三二）、梁の安国寺条（『法苑珠林』巻六三）、梁の小莊嚴寺条（『法苑珠林』巻六四）もオリジナルな『梁京寺記』から引用したものである。上記の三箇寺の所在地は以下となる。

- ① 梁・南冥真寺、在林陵県中興里⁽²⁷⁾。
- ② 梁・安国寺、在林陵県都郡同下里⁽²⁸⁾。
- ③ 梁・小莊嚴寺、在建康定陰里⁽²⁹⁾。

① 梁・宝唱の『比丘尼伝』巻四「禪林寺僧念尼伝」には「梁天監三年卒、葬林陵県中興里内⁽³⁰⁾」とあり、「林陵県中興里」は梁時代にあった地名と確認できる。② 唐・道宣の『続高僧伝』巻五「釈法雲

伝」によれば、「雲以天監末年、欲報施主之恩、於林陵県同下里中造寺一所⁽³¹⁾」といい、「林陵県同下里」も梁時代に使われていたことがわかる。③ 『大正蔵』における『梁京寺記』に同文⁽³²⁾が確認できる。梁・宝唱の『比丘尼伝』巻一「北永安寺曇備尼伝」には「京邑比丘尼尠有曇備之儔也。到永和十年後為立寺於定陰里、名永安⁽³³⁾」とある。「永和」は東晋の年号である。ここにみえる「定陰里」は「京邑」の建康にあったにちがいない。

要するに、「中興里」、「同下里」、「定陰里」はすべて南朝時代に実際に使用されていたことが、これで明らかである。加えて、「南徐州」は南朝時代の州名である。ゆえに、「頻佳里」は南朝時代に存在した地名であることが十分に考えられる。そうすると、この棲霞寺の寺域土地の記録は南朝時代の実情を反映していると推測される。江総の「摂山棲霞寺碑文并銘」は陳・禎明二年（五八八）に成立し、碑陰に刻まれた内容も当初に遡れるだろう。

（二）新出土「江総碑」の碑陰内容にみられる明氏一族

新出土「江総碑」の碑陰の向かって右部には石窟の尊像の尊名・法量・造像主などの情報を記したものがみられる。これは従来知られていなかった内容で、棲霞寺石窟の最初期の詳細を示す貴重な史料である。現在碑陰の下部と右上の角が破損しているため、一部の文字は失われた。読める文字は十行にわたって合計二〇三字である。以下の録文は筆者が実見調査によって作成したもので、四角で囲つ

た文字は今のところ確定し難いものである。⁽³⁴⁾

- ① 法身坐高三丈一尺五寸通坐四丈含髻頭長八尺五寸面
手長六尺九寸兩膝相去二丈五寸并二菩薩立高三丈
- ② 造 齊文惠太子隨喜 齊豫章獻王隨喜 齊竟陵文
- ③ 造 齊明寶寺十五人 大匠左亮之國寶 涑匠建元
- ④ 像身坐高八尺九寸 齊雍州刺史王與為巴陵王造
- ⑤ 沂令明仲璋造 東第三龕像身坐高七尺九寸
- ⑥ 勒下生龕像身高一丈四尺 宋太宰內霍夫人造未成齊竟陵
- ⑦ 衛迦葉龕二像坐身並高五尺四寸 梁東陽州刺史番禺
- ⑧ 太建十一年皇太子 東宮學士傅澤等重莊錢無量
- ⑨ 至德二年吏部尚書江綏率化衆緣重莊錢
- ⑩

①の記述によれば、像は「坐高三丈一尺五寸、通坐四丈」である。「江綏碑」には無量寿仏は「坐高三丈一尺五寸、通座四丈」⁽³⁵⁾とする。つまり、冒頭部は無量寿仏の窟、現在の第十九窟にあたる。②の「二菩薩立高三丈」の記述も「江綏碑」の「二菩薩倚高三丈三寸」⁽³⁷⁾と一致する。③の冒頭部は欠失するが、造像主についての内容であると推測できる。続いて齊の文惠太子、豫章獻王、竟陵文（宣王）の名がみられる。「江綏碑」を参照すると、「齊文惠太子、豫章文獻王、竟陵文宣王、始安王等慧心開發、信力明悟、各舍泉貝、共成福業」⁽³⁸⁾

といった内容に相応することがわかる。すると、「江綏碑」の「其第二子仲璋為臨沂令：与度禪師鑄造無量寿仏」⁽³⁹⁾に照らせば、③の欠失した造像主は明仲璋と法度禪師であることが判明する。上述したように、明仲璋は明僧紹の第二子である。

また、⑥をみると、「沂令明仲璋造」という字句が確認できる。すなわち、無量寿仏の一仏二菩薩のほかにも、明氏一族は別の龕像も造ったことが明らかである。これは「江綏碑」には記されておらず新たに知る内容である。では、明仲璋によって造られたのはどの石窟にあたるか。⑥の「東第三龕像」に注目したい。ここの「東」とは、冒頭の無量寿仏の窟にとつて東にあることを意味する。「東第三龕像」は無量寿仏の窟から東の三つ目の窟、つまり現在の第二四窟を指す。⑤の後半と⑥の前半には「齊雍州刺史王與為巴陵王造」と「沂令明仲璋造」とあり、それぞれ「東第一龕像」と「東第二龕像」の造像主を記した内容と考えられる。すなわち、明仲璋は「東第二龕像」、現在の第二二窟の造像主であることが明らかになった。

第二二窟（図6）は一仏四菩薩二弟子の形式である。中央の仏は方座に結跏趺坐し、両手は欠失して、印相は不明である。菩薩―弟子―菩薩の順で立像が左右両側に三体ずつ配されている。本窟はモルタルの除去が済んだが、いずれの像も損傷が激しく、特に両側の脇侍像は後世の補修・改修の痕跡が確認できた。現時点で補足できる史料がない限り、像容や像種などを解明することは困難であるといえる。ともあれ、上述した碑陰の記載によれば、無量寿仏の第十

九窟以外に、「東第二龕像」の第二二窟も明仲璋によって造られたと考えられる。

三 明氏一族と摂山棲霞寺石窟の創建

以上のように、明仲璋と父の明僧紹が摂山の棲霞寺、棲霞寺石窟に深く関与していたことが、これまで以上に解明できた。陸帥氏は、南渡した元青齊地域の豪族、いわゆる「青齊土民」に注目し、彼らの江南地域での活躍によって摂山棲霞寺石窟が成立したと解釈している⁽⁴⁰⁾。また、宿白氏、稲本泰生氏は摂山棲霞寺石窟の石仏が北朝、特に雲岡石窟から影響を受けたと示唆している⁽⁴¹⁾。



図6 第二十二窟

確かに、諸先学が指摘したように、摂山棲霞寺石窟の創立と北方仏教・北方社会との関わりは看過できない。山東省で発見された造像記に記された多くの造像主は、本来華北から青齊地域に移住した豪族であったことが指摘されている⁽⁴²⁾。こうした北人の南渡に伴い、仏教造像活動が活発に行われた華北地域や青齊地域から仏像やその粉本が江南地域にもたらされたことが推測される。明氏もこのような時代背景のもとで南渡した北人の一族である。ただし、摂山棲霞寺だけに限らず、明氏一族にとって仏教は重要な位置を占めている。本章では諸文献の記載を分析し、明氏一族と仏教の関係の一端を示しながら、彼らが石窟を造営した理由について私見を述べたい。

まず、明僧紹の生涯については、吉川忠夫氏が詳細に研究している⁽⁴³⁾。ここで明氏が南渡以降仏教に転向したことに注意しておきたい。『南齊書』、『南史』の記載によれば、明僧紹は嶗山（現在の山東省青島市）に学塾を開き、儒学を講じていたが、泰始五年（四六九）に青齊地域が北魏に占領されたことで江南に渡り、鬱州（現在の江蘇省連雲港市）に住して、建元二年（四八〇）頃に摂山に辿り着いたという。上述の嶗山と鬱州はともに神仙思想にゆかりの深いところである⁽⁴⁴⁾。その一方、明僧紹の学問について、「明徵君碑」には「儒肆該総典、墳論極玄津。精通老易、至若鹿野。龍宮之秘、猿江鶴木之文、莫不通貫⁽⁴⁵⁾」と称え、儒・道・仏三教に精通していたことがわかる。しかし、南渡以前の各記述を確認する限り、明僧紹は仏教との関わりが文献上に見えないのである。この時期に戦乱が頻繁に起

こり、隠逸しても軍事勢力を握っていた青齊豪族の明氏の一員である明僧紹も動乱を免れなかったと指摘されている。⁽⁴⁶⁾ゆえに、明僧紹は嶗山と鬱州での儒学や道学に対する試みが頓挫してしまったことも想像される。

一方、南渡後の明僧紹は、一層仏教に急接近していった。黄龍（現在の遼寧省のあたり）出身の法度禪師は撰山で無量寿経を講じ、僧紹は師友の敬意をほらわれたという。⁽⁴⁷⁾また、『南齊書』、『南史』には「僧紹聞沙門釈僧遠風徳、往候定林寺」⁽⁴⁸⁾とあり、僧紹は釈僧遠⁽⁴⁹⁾の風徳を慕って鐘山の定林寺をたずねたという。僧遠は渤海重合の出身で、青州地域で有名な道慧に弟子入りした。この記事はやはり吉川氏が指摘したように、僧紹が青齊地域や東部沿海地域出身の僧侶と密接な関係を有したことを示している。さらに、梁・慧皎の『高僧伝』巻八の「釈僧遠伝」の以下の記述に注目したい。すなわち、

宋明踐祚、請遠為師、竟不能致。其後山居逸迹之賓、傲世陵雲之士、莫不崇踵山門、展敬禪室。廬山何点、汝南周顒、齊郡明僧紹、濮陽吳苞、吳国張融、皆投身接足、諮其戒範。⁽⁵⁰⁾

これによれば、宋の明帝（即位四六六）は僧遠を師として招くことが叶わなかったが、山に隠逸する士人たちは僧遠のところにためかけ、敬意をほらったという。「齊郡明僧紹」もその中の一人である。明僧紹は身を投げ出して足元に礼拝し、戒律のことを僧遠に諮った。

戒律という仏教信者が守るべき規律や規則について僧遠に尋ねるところとは、大変興味深い。恐らく明僧紹は戒律についてある程度の理解があったが、実践上の不明点をより明らかにするため僧遠に尋ねたと想像される。

また、梁・僧祐の『弘明集』巻六には明僧紹による「正二教論」が収録されている。これは道教の立場から論じた顧歡の『夷夏論』に対して、明僧紹が仏教側から持ち出した反論である。以上のように、南渡以降の明僧紹は仏教に接近したことが確認される。

明僧紹没後、第一子の元琳、第二子の仲璋、第三子の山賓はともに家業を継いだという。⁽⁵¹⁾第一子の元琳については、史実を補う記述がみえないため、詳細は不明である。第二子の仲璋は上述した撰山棲霞寺石窟の無量寿仏像（第十九窟）と「東第二龕像」（第二二窟）の造像主なのである。第三子の山賓は梁武帝期の五経博士に任ぜられ、「莊嚴寺法雲法師与公王朝貴書」（『弘明集』巻一〇に収録）の「五経博士明山賓答」という一条にその名がみられる。本篇は同巻の「大梁皇帝勅回答臣下神滅論」（梁武帝の撰述）とともに、范縝の「神滅論」に対して批判したものである。ここで山賓は「今棄周孔之文、背釈氏之真説」⁽⁵²⁾と論じ、儒教と仏教が調和するとする説で神滅の論を非難した。山賓は父の僧紹と同じく、儒者でありながら、仏教にも造詣があったことがうかがえる。また、『続高僧伝』巻六の「釈僧詢伝」には以下の記述がみられる。

釈僧詢、姓名、太子中庶山賓之兄子也。年始入礼。嘗聽山賓共客談論、追領往復、了無漏失。賓撫其首曰…今使吾門不墮者、其在爾乎。父奉伯篤信大法、知其聰俊可期、神幽冥長濟愛海。年十二勅令出家、為奉誠寺僧辯律弟子。⁽⁵³⁾

僧詢は明氏の一員で、山賓の兄の子である。父の奉伯は篤く仏法を信仰していたという。ただし、補足史料が見当たらないため、この奉伯とは元琳か、仲璋か、または別兄弟か、判明できない。いずれにせよ、明僧紹の子の代になると、明氏家族に仏教の信者が現れたと考えられる。また、言ったことすべて復唱でき、明氏一族の家門が堕ちないように保証できるのは僧詢だと山賓は語り、その後、僧詢は出家して僧辯に弟子入りした。ここで興味深いのは、僧詢の活躍と明氏一族の名誉が結びつけられており、その実現の手段は仏教の出家者になることという点である。この記述は唐僧の道宣によつて書物から引用されたもので、仏教側の撰述意図などを考慮すれば、若干誇大な内容を入れ込んだ可能性も否定できない。しかし、明氏一族は明僧紹の代から徐々に仏教に敬服し、信仰して、ついに孫の代に僧侶、しかも『続高僧伝』に立伝された高僧が現れたことは、確かなのである。

明僧紹は青齊地域の動乱を避けて転々とし、青齊士族たちの南渡の動向の中ではかなりおそくなってから泰始五年に南に移り、ようやく南齊の建元二年に摂山に着いた。当初の摂山について、「江総

碑」に以下の記述がある。すなわち、

南徐州瑯琊郡江乘界、有摂山者、其状如嶽、亦名嶽山。尹先生記曰…山多藥草、可以摂養、故以摂為名焉。南瞻旧落、顧悌鎮戍之塢。北望荒村、扈謙卜筮之宅。此山西南隅、有外道館地。⁽⁵⁵⁾

摂山についての記述は南北朝時代とその以前の文献には滅多に見えず、「江総碑」が早い例として挙げられる。これによれば、摂山は藥草が豊富などところであつたという。山の南の旧落に三国時代の孫呉の顧悌が鎮守した村塢がみられる。山の西の荒村には東晋の占者である扈謙が卜筮をした宅がある。山の西南隅に外道の道教の道館があるという。明僧紹の到着以前には、摂山には村落、民間信仰の占術や、道教が存在していたことがわかる。ただし、仏教が存在した痕跡は見当たらない。

一方、建康城の近傍、例えば鐘山には、すでに寺院・道館・祠廟・学館・隱舎・皇族や士族の園宅や墓葬が集まつた多重的な地理空間が現れていた。⁽⁵⁶⁾先述した釈僧遠は鐘山の upper 定林寺に止住した。明僧紹は僧遠をたずねた際にこうした多様な鐘山の景觀を目にしたことが想像される。蔡宗憲氏は、明僧紹が摂山でよく僧侶と交流したことがきっかけとなって、摂山の仏教を發展したとしている。⁽⁵⁷⁾筆者はさらに、明僧紹とその一族は種々の情勢について熟考した上で摂山

を選び、石窟と石仏を造立したことによって、撰山で仏教を發展させたと指摘したい。

『南史』の「明僧紹 僧紹子山賓伝」の末尾では「明氏南渡雖晚、並有名位、自宋至梁為刺史者六人⁽⁵⁸⁾」と評されている。その詳細を表1にまとめてみた。これによれば、刺史の六人のうち、僧皓（僧紹の次兄）、慶符（僧紹の弟）、少暇（僧紹の第四子）は青州刺史となり、僧胤（僧紹の長兄）は冀州刺史に就いたという。明氏が任命された青州と冀州はともに青齊地域の豪族が勢力を具えた土地であった。青齊地域の豪族は宋齊時期に地方で複雑に絡み合う関係を持っていたため、地方の管理には彼らの協力が欠かせなかったとされる⁽⁵⁹⁾。つまり、明氏のような青齊地域の豪族は地方で強い基盤が築けたのである。明氏の刺史歴もこの点を反映しているといえよう。

その一方、東晋時代から南渡北人は長らく貴族制度の江南で不遇の状況に置かれた⁽⁶⁰⁾。一つの理由として挙げられるのは、北方の士族では經学の伝統が強かったのに対し、江南地域の貴族は老莊の清談といった玄学の風潮に乗っていたことが指摘されている⁽⁶¹⁾。さらに、建康の貴族が北人の儒学者を受け入れなかった事例も挙げられる⁽⁶²⁾。そうすると、江南地域で学塾を経営するのは容易なことではなかったと思われる。明僧紹が仏教を利用して新たな土地で新しい基盤を築こうとした可能性は否定できない。

なお、先述した鐘山のような地理空間が形成された理由は、南朝時代に建康の都城の発達にともない、その一部の機能、特に文化的

な機能が郊外に流出し、分担されたと解釈されている⁽⁶³⁾。また、鐘山は齊梁時期に建康の皇室や士族と密接な関係を持っていた。撰山棲霞寺石窟の南朝期窟の造像主、あるいは関与者には南齊の文惠太子、豫章文獻王、竟陵文宣王、始安王など皇室のメンバーや王與のような高門の名がみられる。これは明氏一族による石窟の開鑿や石仏の造立においても同様の効果を得たと考えられる。

表1 明氏一族の刺史嘱任一覧

名	僧紹との関係	官名
僧胤	長兄	冀州刺史
僧皓	次兄	青州刺史
慶符	弟	青州刺史
慧照	長兄の子	巴州刺史、益州刺史
山賓	第三子	北兗州刺史
少遐	第四子	青州刺史

四 仏教信仰者として現れる山神

以上述べてきたように、晩期の南渡北人であった明氏一族は、江南地域に到着して仏教と接近し、撰山で寺院を建立し、石窟や石仏を造ることによって建康の中心権力層との関わりを得、青齊出身士族の新しい基盤を築いたと想定される。六世紀の後半になると、撰

山は三論学の拠点へと発展した。その時期、青齊地域、東部沿海地域出身の僧が棲霞寺で活躍していただけではなく、蘇州、揚州などの江南地域の僧も棲霞寺に来て止住したり、棲霞寺の僧が江南地域を越えて鄴、長安、湘州で弘法したりした事例も確認されている。⁽⁶⁴⁾

摂山仏教も健康仏教の欠かせない一角になったのである。ここで興味深いのは、諸文献にしばしば登場する摂山の山神の存在である。本章は摂山の山神についての記述を取り上げる。その性格の変遷もまた、明氏一族が摂山で仏教を発展させた策略が奏功したことをと示唆するものと考えられるのである。

摂山の山神について、「江総碑」には以下のように記されている。すなわち、

又按『神録』云…楚斬神、在今臨沂県。齊永明初、神詣法度道人受戒。自通曰斬尚。即楚大夫之靈也。大同元年二月五日、神又現形、著菩薩巾、披袈裟、閑雅甚都。來入禪堂、請寺衆說法。⁽⁶⁵⁾

『神録』という書物については、詳細不明であるが、これによれば、摂山の山神は屈原と同時代の楚の大夫であった斬尚の霊が化した神で、今は臨沂県にいるという。臨沂県は南徐州に属し、上述の明仲璋は臨沂令に任じられていた。南齊の永明初年（四八三頃）、山神は法度によって受戒したという。つまり、仏教が摂山に現れた直後

に、山神は仏教の信仰者になったことがわかる。さらに、大同元年（五三五）二月五日に山神がすがたを現わした際には、菩薩巾を被り、袈裟を着していたという。「菩薩巾」に「袈裟」という姿は仏教の出家者を連想させる。こうした風体の摂山の山神は他の書物にも確認できる。

すなわち、『法苑珠林』卷八三の「釈慧景条」には、

中大同元年二月五日、摂山神現形、著菩薩巾、披袈裟、形貌極端正。侍従左右三十余人、一人捉香炉在前。來入禪堂詣、弘誓法師所。自坐胡床、与法師共語、並請寺衆行道。⁽⁶⁶⁾

とあり、本条は道宣の『続高僧伝』から引用したものであるという割注が付されているが、同話あるいは類話は現在の『大正蔵』所収の当該書には見当たらない。ここでの山神も同様に「菩薩巾」と「袈裟」を身に着けるといふ特徴がみられる。また、三十人くらいの侍従が付き添い、一人は香炉を持ちながら先頭で導いたという。⁽⁶⁷⁾こうした立派な出行場面は、北魏時代の龍門石窟や鞏県石窟に表された「礼仏図」を想起させるだろう。これも仏弟子としての山神が仏や僧に対して敬意を表しているものと捉えられる。この二つの記事は内容的に極めて近く、同様の由来を示している。それに対して、『高僧伝』卷八の「釈法度伝」には受戒前の山神について、

（度）住経幾許、忽聞人馬鼓角之声、俄見一人持名紙、通度曰斬尚。度前之、尚形甚都雅、羽衛亦嚴。⁽⁶⁸⁾

とある。本条に記された山神の斬尚の姿はとても優雅であったが、人馬や太鼓や角笛の音とともに現れたという。威厳のある羽衛を帯同することで、武人としてのイメージが浮ぶ。また、武人の山神は上述の『法苑珠林』巻三六の「齊棲霞寺」にもみられる。すなわち、

或有念誦、小有疲懈。山神現形、又著烏衣、身長一丈、手執繩索。僧衆驚懼、誦習不懈。⁽⁶⁹⁾

これとほぼ同文のものは上述の「釈慧景条」⁽⁷⁰⁾に載っている。すなわち、

普通元年四月二十四日、有新受戒僧慧徵、往屋中誦戒。小有疲懈。山神現形、又著烏衣、手執索。慧徵驚懼還寺。⁽⁷¹⁾

これによれば、念誦の時、僧が怠けたら、身長が一丈もある山神が現れ、黒い衣を着し、縄索を手執っていたという。この「烏衣」と「縄索」もやはり武人にふさわしい姿だろう。山神は僧侶の失儀を矯めて監察の務めを担い、仏教の護法善神として役割を果たしたと理解されている。⁽⁷²⁾

以上のように、撰山の山神は受戒前の武人―仏教の護法善神―仏教の出家者といった性格の展開が確認できた。『高僧伝』の記事について、慧皎の撰述は天監十八年（五一九）を下限とするが、実際の成立年代は中大通五年（五三三）とされている。⁽⁷³⁾つまり、撰山の山神の説話は遅くとも中大通五年には成立していたと考えられる。この説話が増広され続けてき、出家者の山神が現れるようになった。これは、仏教が民間信仰や道教に勝って撰山において優位となったことを示唆すると解される。⁽⁷⁴⁾しかし、同時代の諸文献に登場する山神と比べると、こうした出家者のすがたをした山神は極めて珍しいともいえる。言い換えれば、仏教はただ優位になっただけではなく、撰山における唯一の信仰になったことを示しているのではないだろうか。こうしたことも明氏一族による石窟と石仏の造立といった撰山仏教を発展させた結果の一つとして捉えられる。

むすび

以上の四章にわたって撰山棲霞寺石窟の成立について再検討した。結論は以下のとおりである。

第一に、新出土「江総碑」の成立年代についての考察を行った。碑陰には「頻佳里」という地名が見られる。同様の地名は『梁京寺記』から引用した『法苑珠林』の「齊棲霞寺条」でも確認できた。さらに、「頻佳里」を管轄した「南徐州」は、劉宋の永初二年（四

二一）から隋の開皇九年（五八九）まで使われていた州名で、南朝時代当初のものと考えられる。

第二に、新出土「江総碑」の碑陰に摂山棲霞寺の成立期に造られた各尊像の尊名・法量・造像主などの情報が確認できる内容が見出せる。これによれば、千仏岩の南面と南東面の下部にある十九窟、二十窟、二四窟、二二窟、二三窟、十八窟の各像の制作開始年代は、五世紀末～六世紀の初めに遡る。これは考古学調査の結果とも一致する。

第三に、従来伝世「江総碑」によれば、明僧紹の子である仲璋は第十九窟の無量寿仏と二菩薩を造立したことが知られていたが、新出土「江総碑」の碑陰にいう「東第二龕像」、すなわち、第二二窟の造像主も仲璋であることが確認できた。青齊地域から南渡した明氏一族は摂山棲霞寺の成立と深く関与していたことが改めて確かめられた。

第四に、明僧紹は南渡以降江南地域の僧侶と交流したり、仏道の論争で仏教の立場から反論を出したり積極的に仏教に接近した。彼の子の代や孫の代にも仏教の尊崇者や僧侶が見られる。つまり、明僧紹とその一族は意欲的に当時仏教がなかった摂山で石窟や仏像を造立し、寺院を開基し、仏教を発展させることによって、江南地域で新しい士族の基盤を築いたと考えられる。

第五、五世紀末から六世紀末にかけて、摂山の山神にまつわる説話によれば、山神は受戒前の武人―仏教の護法善神―仏教の出家者

といった性格の展開がみられる。出家者として現れる山神は仏教が摂山で絶対的に優勢になったことを語っている。これも明氏一族によって摂山仏教が発展した結果の一つとして理解できる。

本稿では明氏一族と摂山棲霞寺石窟の成立、特に南渡北人としての明氏が石窟を造立した動因を中心に論じた。ただし、摂山棲霞寺石窟にみられる南朝に特有な要素も見逃せない。それは従来釈迦多宝並坐とされた第十八窟（図7）である。しかし、第二章に詳述し



図7 第十八窟 維衛迦葉二仏並坐

た新出土「江総碑」の碑陰によれば、この二像は維衛仏と迦葉仏であることがわかる。これは道宣の『集神州三宝感通録』巻中の「西晋呉郡石像浮江縁」を想起させる。この説話は江南地域と因縁の深い瑞像として二仏を語り、敦煌莫高窟第三二三窟南壁や、第九窟甬道頂部に描かれた。第三二三窟の本説話画（図8）においては、維衛仏と迦葉仏は立像で表され、撰山棲霞寺石窟の第十八窟のような二仏並坐の表現はみられない。この二像については、新資料の発見に期待し、今後の課題としたい。



図8 敦煌莫高窟第三二三窟 呉郡石像浮江

注

- (1) 『大正蔵』巻二一、九二頁c。
- (2) 『大正蔵』巻二〇、六〇四頁b。
- (3) 平陽府君闕の研究については、以下の論考が参照される。孫華、鞏発明『平陽府君闕考』、『文物』一九九一年第九期、六一～六九頁、七九頁。孫華『四川綿陽平陽府君闕身造像——兼談四川地区南北朝仏造像的几个問題』、『漢唐之間の宗教芸術と考古』、文物出版社、二〇〇〇年、八九～一三八頁。符永利、劉超『四川平陽府君闕身造像の初步研究』、『石窟寺研究』第七輯、二〇一七年、一六四～一九七頁。
- (4) 賀雲翱『六朝都城仏寺和仏塔の初步研究』、『東南文化』二〇一〇年第三期、一〇一～一一三年。現在南京市六朝博物館所蔵の德基広場出土金銅製一仏二菩薩像の光背には「大通元年八月廿三日」の紀年銘があるという。大通元年は梁の年号で、五二七年である。費泳『南京德基広場出土南朝金銅仏造像の新発見』、『芸術探索』二〇一八年第一期、五二頁。
- (5) この仏寺遺址の考古報告書はまだ刊行されていないが、二〇二二年四月二十八日から南京市の六朝博物館で開催された「煙雨楼台——西宮村考古紀実展」には金銀器、陶器、仏像、建築構造物材品など二百余件の出土品が展示された。二〇二二年十月二十五日北京大学で開催された「陸疆与海疆——仏法東漸与石窟芸術」にて南京市考古研究院の龔巨平氏は「南京西宮村南朝仏寺遺址発見与収獲」と題して口頭発表をおこなった。ここではその発表内容に基づいて筆者がまとめた。
- (6) 吉川忠夫「五、六世紀東方沿海地域と佛教——攝山棲霞寺の歴史によせて」、『東洋史研究』第四二巻第三号、一九八三年、一～二七頁。後「六朝隋唐文史哲論集Ⅱ——宗教の諸相」（法蔵館、二〇二〇年）に収録。
- (7) 調査関連の「撰山仏教石刻小紀」、「撰山仏教石刻補紀」の二篇は氏の『唐代長安与西域文明』（商務印書館、二〇一五年、四五四～四七七頁、四七八～五〇一頁）に収録される。
- (8) 向達氏は「撰山仏教石刻小紀」の「補注」において棲霞寺石窟最古の題

記とされる「梁中大通」の拓本に言及したが、実見はしていなかったようである。任竊氏は一九二八年にその題記を確認し、当該の窟に「中華民國十七年四月十五日市政府任竊来游并觀大通題字」という一文を残した。

- (9) 宿白「南朝龕像遺跡初探」、『考古學報』一九八九年四期、三八九～四一三頁。

- (10) 摂山棲霞寺石窟の考古調査の詳細については、以下を参考とする。林蔚「棲霞寺千仏岩区南朝石窟の分期研究」、『燕京學報』新十九期、二〇〇五年、二七五～三〇八頁。魏正瑾、白寧「南京棲霞寺南朝石窟考古概要」、『石窟研究』第二輯、二〇一一年、一九一～二〇三頁。張雯「成都地区南朝石窟造像与南京棲霞山南朝窟龕的分期与比較」、『石窟研究』第二輯、二〇一一年、二〇四～二三六頁。魏正瑾、白寧「棲霞山石窟南朝無量寿大仏勘察記」、『石窟研究』第三輯、二〇一二年、一～一六頁。陳晶鑫「棲霞山唐五代石窟的分期」、『石窟研究』第四輯、二〇一三年、一九八～二四六頁。魏正瑾、白寧「南京棲霞寺千仏岩石窟寺考古方法論的实践」、『石窟研究』第八輯、二〇一八年、七七～一〇五頁。また、公表された資料によると、一九九二年に南京市文物管理委员会が一度千仏岩石窟を編号したが、現在は使用されていないようである（汪永平、潘慶林「南京棲霞山千仏岩石窟的測繪与編号」、『東南文化』一九九九年第四期、八一～八七頁）。林蔚氏の「棲霞寺千仏崖第十三窟的新発見」では無量寿仏龕を第十四窟とし、隣の二仏並坐龕を第十三窟とする（『文物』一九九六年第四期、三三一～三六頁）。項長興氏、徐業海氏は石窟の題記をまとめて紹介した論において無量寿仏龕を第一窟とし、最古の題記のある窟を第六一窟とした（『棲霞寺千仏岩石窟尋覓仏龕題刻跡迹』、『敦煌研究』二〇〇六年第二期、二三～二八頁。「梁中大通二年」紀年摩崖的発見—棲霞寺千仏岩六一号仏龕南梁紀年題名石刻」、『東南文化』二〇〇六年第三期、八五～八六頁）。ただし、林蔚氏と項、徐両氏は番号の付け方を示さず、詳細は不明である。そのほか、符永利氏は博士論文「南朝仏教造像的考古学研究」で独自の石窟番号を使っている（『南京大学考古学及博物館学博士論文』、二〇一二年）。

- (11) 報告書では南東岩壁の外側の二七窟を第一期に区分しているが、他の窟と比べると、その形制も、仏像の構成も、特殊なものといえる。現状では鏝風の着装をしている一体の力士立像であるが、岩壁に建られた石製構造は明代のものという（前掲注(10)林蔚氏二〇〇五年論文、二九〇頁）。

- (12) 開鑿年代について、宿白氏をはじめとする研究者は一般に、明僧紹の没年の南齊永明二年（四八四）を上限とし、釈法度の没年の建康武四年（四九七）あるいは永元二年（五〇〇）を下限とする。ただし、吉川氏の考証によると、明僧紹の没年は永明七年（四八九）以降であるという（前掲注(6)、二三頁）。すると、上限は永明七年以降に訂正を要する。また、開鑿年は劉宋時代に遡るとする説も挙げられる（前掲注(10)符永利氏博士論文、二七～三三頁。費泳「南京棲霞山新発見的「江総残碑」及相關問題」、『南京芸術学院學報』、二〇一八年一期、七四～七五頁）。この劉宋開鑿説に対して、慎重な検討を要するとする意見もある（陸帥「地望、書写与断代・六朝建康碑誌三種研究叢札」、『古典文献研究』、二〇二一年一期、二六九～二七二頁）。

- (13) 稻本泰生氏は天監十二年（五一三）から天監十四年（五一五）に無量寿仏窟が完成されたとする。稻本泰生「南京棲霞寺石窟試論—五世紀末～六世紀初頭の建康造像の位置づけをめぐる」、『仏教史学研究』三九（二）、一九九七年、七～一四頁。

- (14) 現状では第十二窟の主尊は結跏趺坐であるが、台座の前に踏割蓮華座が確認できたため、本来は両足を踏み下げる倚坐であったことがわかる（前掲注(10)林蔚氏二〇〇五年論文、二八二頁、三〇三頁）。

- (15) 前掲注(10)魏正瑾、白寧両氏二〇一二年論文、五～九頁。

- (16) 前掲注(10)魏正瑾、白寧両氏二〇一二年論文、四～一頁。

- (17) 現在故宮博物院が所蔵する「江総碑」の明代の拓本は北宋時代に立てられた石碑を写し取ったものである。最後に跋記を付す。すなわち、「此碑経唐会昌毀廢、後已嘗重立。至今其石斷缺、文字訛隱。前充寺主僧契先自捨觀贊購石、依本写之。康定元年三月十七日鐫立。本寺維那僧肅澄、上座

僧智達、寺主僧元聳謹記、袁文雅刻字」。また、葛寅亮『金陵梵刹志』の当該碑文の割注には「此碑經唐會昌毀廢、後已曾立。至今其石斷缺、文字訛隱。寺主僧契先購石、依本寫之。康定元年三月十七日鑄立」とある。これは上述の跋記とは一致し、葛寅亮の実見による記録であろう。文字の齟齬は磨滅による誤記と考えられる。

- (18) 新「江総碑」の碑陽の拓本や録文は公表されていないが、その校勘は邵磊『南京棲霞寺創建史実考』以新発見江総碑残石為中心（『東亜文明』第二輯、二〇二一年、一一一～一一五頁）を参照。

- (19) 明・葛寅亮『金陵梵刹志』卷四（藍吉富『大藏經補編撰録』第二九冊、華宇出版社、一九八五年、第一二二頁a）。

- (20) 前掲注(18)邵磊氏論文、一一八～一九九頁。前掲注(9)宿白論文、三九〇頁。

- (21) 前掲注(18)邵磊氏論文、一九九頁。

- (22) 例えば、「類佳里」^上「塘一所」、「類佳里梨園」^園一所、「類佳里」^園地一所」など地名を表す「類佳里」が確認できる。そのほか、「文陳塘」、「式辟里」などの地名も見出せる。

- (23) 『大正蔵』卷五三、五七二頁a。

- (24) 蔡宗憲氏によると、「類佳里」は「羅落里」、「羅落」、「羅落橋」とも呼ぶという。建康への要地（京口）に位置した類佳里の附近では戦乱がよく起った。蔡宗憲「五至七世紀の撰山仏教と僧俗網絡」、『台灣師大歷史學報』第五五期、二〇一六年、八四～八六頁。

- (25) 諏訪義純『「梁京寺記」資料考』、『印度學佛教學研究』二六（一）、一九七七年、九一～九六頁。後『中国南朝仏教史の研究』（法蔵館、一九九七年、一三七～一四六頁）に収録。

- (26) 中村圭爾『六朝江南地域史研究』、汲古書院、二〇〇六年、一二五～一二六頁。施和金『中国行政区划通史・隋代卷』、復旦大学出版社、二〇〇九年、六〇頁、六七頁。

- (27) 『大正蔵』卷五三、五七二頁a。

- (28) 『大正蔵』卷五三、七六六頁a。

- (29) 『大正蔵』卷五三、七七二頁b。

- (30) 『大正蔵』卷五〇、九四五頁c。

- (31) 『大正蔵』卷五〇、四六四頁b。

- (32) 『大正蔵』の『梁京寺記』には「梁小莊嚴寺、在建業定陰里」（卷五一、一〇二四頁a）とある。建業は建康のことである。

- (33) 『大正蔵』卷五〇、九三五頁c。

- (34) 四角で囲んだ文字は、邵磊氏が「棲霞寺千仏岩南朝石窟の開鑿年代と功德主」と題としたオンライン講座（二〇二二年五月十五日）で公表した資料を参照した。

- (35) 前掲注(19)、第一二四頁a。

- (36) 新「江総碑」に「立高一」とする。すると、伝世「江総碑」の「倚高」は誤記であることがわかる。

- (37) 前掲注(19)、第一二四頁a。

- (38) 前掲注(19)、第一二四頁a。

- (39) 前掲注(19)、第一二四頁a。

- (40) 陸帥「青齊土民」与南朝社会——以五六世紀撰山千仏岩為中心、『東南文化』、二〇一五年六期、九二～九八頁。

- (41) 前掲注(9)、四〇六～四〇九頁。前掲注(13)、一四～二八頁。

- (42) 前掲注(40)、九六頁。

- (43) 前掲注(6)、三～一六頁。

- (44) 前掲注(6)、一八～二〇頁。

- (45) 前掲注(19)、一四九頁a。

- (46) 前掲注(6)、三～一〇頁。

- (47) 「江総碑」には「（法度禪師）与僧紹冥契甚善。嘗於山舍講無量寿仏經」（前掲注(19)）とある。また、『高僧伝』卷八「釈法度伝」には「明僧紹：待以師友之敬」（『大正蔵』卷五〇、三八〇頁b）とある。

- (48) 『南齊書』卷五四（中華書局、一九七二年、九二七～九二八頁）。『南史』

- 卷五〇（中華書局、一九七五年、一二四一～一二四四頁）。
- (49) このほか、明僧紹と釈僧遠の交際事例について、『南齊書』卷五四には以下の対話がみられる。すなわち、「僧遠問僧紹曰：天子若来、居士若為相對。僧紹曰：山藪之人、政當鑿壤以遁、若辭不獲命、便當依戴公故事耳。」「南史」卷五〇ではその続きを「既而遁還摂山、建棲霞寺而居之」と言い足している。
- (50) 『大正蔵』卷五〇、三七八頁a。
- (51) 『南史』には「僧紹子元琳、仲璋、山賓並伝家業」とするが、『南齊書』には「子元琳、字仲璋、亦伝家業」とする。吉川氏により、ここでは前者に従う（前掲注(6)、二二三頁）。
- (52) 『大正蔵』卷五二、六六頁c。
- (53) 『大正蔵』卷五〇、四七五頁a。
- (54) 呂春盛「東晋時期「晚渡北人」的形成及其不遇的原因」、『台灣師大歷史學報』第五〇期、二〇一三年、四七～七頁。
- (55) 前掲注(19)、一二三頁b。
- (56) 魏斌「南朝建康的東郊」、『中國史研究』、二〇一六年第一期、六七～八四頁。後『山中』的六朝史（生活・讀書・新知三聯書店、二〇一九年）に収録。
- (57) 蔡宗憲「中古摂山信仰の変遷——兼論人鬼神祠的改祀与毀撤」、『唐研究』一八、二〇一二年、二～三頁。
- (58) 『南史』卷五〇、中華書局、一九七五年、一二四四頁。
- (59) 韓樹峰『南北朝時期淮北地区的边境豪族』、社会科学文献出版社、二〇〇三年、一～三九頁。
- (60) 東晋時代の南渡北人については、前掲注54呂春盛氏論文、胡宝国「晚渡北人与東晋中期的歷史變化」（『北大史學』第一四輯、二〇〇九年、九四～一一一頁。後『将無同一——中古史研究論文集』（中華書局、二〇二〇年）に収録）などを参照。
- (61) 前掲注(54)呂春盛氏論文、二二～二三頁。
- (62) 『梁書』卷四八には「時北来人、儒学者有崔靈恩、孫詳、蔣顥、並聚徒講説、而言辭鄙拙。惟広言論清雅、不類北人」とある（中華書局、一九七三年、六七八頁）。
- (63) 前掲注(56)。
- (64) 前掲注(24)、八七～九一頁、九四～九八頁。
- (65) 前掲注(19)、第一二五頁a。
- (66) 『大正蔵』卷五三、九〇一頁a。
- (67) 山神の周りに侍従が付き添う例は、蔡宗憲「仏教文献中的山神形象初探索」（張広達先生八十華誕祝寿論文集）、新文豊出版公司、二〇一〇年、九九三～九九五頁）を参照。
- (68) 『大正蔵』卷五〇、三八〇頁b。
- (69) 『大正蔵』卷五三、五七二頁a。
- (70) 「釈慧景条」の後半部に興味深い靈験談がみられる。すなわち、「又至其年四月四日夜。爾時大風、禪堂僧智遠等、聞外如有数十人行声。至後夜、見当戸辺有一木。景、智遠等仍還大寺解斎。比還、開禪堂戸、已見此。景在禪床坐、見一紙書、令安置故禪堂後石窟中。慧虔初捧不移、末道当移石窟、即便輕拏」。本条の舞台が棲霞寺だとしたら、ここにいう「石窟」は千仏岩にある南朝窟に当たるとする。また、この石窟は「故禪堂」の後ろにあるとし、石窟の正面に建築が存在したようである。ただし、こうした靈験談は史実として扱うには慎重な検討を要する。
- (71) 『大正蔵』卷五三、九〇一頁a。
- (72) こうした僧侶の行為を監察する役割を果たす武装風の護法善神は劉宋期の建元寺の毘沙門天と迦毘羅王が挙げられる（拙論「四川成都出土の天王像の鎧について——同仁路出土像を中心に」、『仏教芸術』七号、一四～一五頁）。すると、摂山の山神も南北朝時代における仏教の護法善神についての記述の文脈の中で捉えられるだろう。
- (73) 紀貫『慧皎「高僧伝」研究』、上海古籍出版社、二〇〇九年、三三～三五頁。

(74) 前掲注(6)、一三〇一五頁。

(75) 造像記に「齊永明六年太歲在戊辰於吳郡敬造維衛尊像」とある石像は紹興博物館で所蔵されている。金申氏によると、この像は五代に造られたと同時に「永明」の造像記を模倣したという。金申「解析數尊南朝の疑似佛像」、『東南文化』、二〇〇三年一〇期、四二―四五頁。

図版出典

図1 張雯「成都地区南朝石造像与南京棲霞山南朝窟龕的分期与比較」、『石窟研究』第二輯、二〇一一年、図二三。

図2 邵磊、李文「楮墨留香 南京大学博物館藏棲霞寺歷代題刻拓本」、『大衆考古』、二〇二二年六期、三七頁。

図3・図4・図5・図6・図7 執筆者撮影

図8 中国敦煌壁画全集編輯委員会『中国敦煌壁画全集5・敦煌初唐』、遼寧美術出版社、天津人民美術出版社、二〇〇六年、図一三九。